

『日本政記』論賛所説の批判的考察

高瀬学

目次

まえがき

本論

I 日本政記論賛所説の構造

II 論賛所説の底層的メカニズム

注

まえがき

我々を囲繞している輓近の政治状況を看望する時、我ら戦中世代は一体我々が経た太平洋戦争とは何んであったかを改めて問い直さざるを得ぬ思いがする。この問いかけは特に我々のような「きけわだつみの声」世代にとって極めて重い意味をもっているようである。戦野で我々より遙かに豊かな可能性を秘めた青春を散らしていった仲間たちが日本というこの国に払った犠牲に思いを致す時、徒なる慷慨は無用であり、まさしくヨーロッパで四百年もかかった

政治の合理化と真剣に取り組まねばならぬという切なる気持にかられざるを得ない。^①

とりわけ、今日の政治状況には英米流のクロスオーバー的党関係も生ぜぬままに、^②デモクラシーの立枯れ現象が見られ、その戦前並みの教条性タブー化、更には「褻」論に影をのぞかせている日本的心情の再生産など、あの流血の意味に何か疑問を投げかけねばならぬ憂慮すべき事態に我々の焦躁の念は深まるばかりである。

だが諺にも言うように待て暫しである。短絡的にヨーロッパと日本の思想構造をただエントウェーダー・オーダーの形で性急に見るべきではない。徒らなる西欧主義と日本主義の対峙化は既に拙稿「デモクラシーの論理」でも触れたようにロシアにおけるザパードニキとスラヴヤノフィリの手袋の投げ合いと同質でしかないのである。仮令迂路であり、その帰趨が非生産的であれ、褻と原罪とに異質な断面を覗かせている日本と西欧の思想構図をより深層的な次元でとらえ、ともどもに未完なものを帶有しているという消極的な共軛項でそれぞれの長所と短所とを素描し、積極的な接合構図をいかなる方法でつくりあげるかを追うべきであると思考するものである。

こういった私自身のあまりにも私的な発想によりつつ、本稿では西欧図式への非西欧側が示す抵抗の基底に西欧思想構図の帶有する空洞性の存在を指摘した前稿を承けて、^④非西欧構図の一典型たる日本的思想の一模型を頼山陽「日本政記」論賛でとらえ、^⑤この特異な個性の中で動いている日本思想構図を示すことにしたいと考えるものである。

I 日本政記論賛所説の構造

ところで、ここでとりあげる論賛は天保三年九月山陽が書国朝政記稿本後という跋文で論八十余首と記しているも

のである。^① 岩波版大系によると九十二^②が掲げられており、山陽が、この年九月二十三日に没した時、果してどこまでが山陽の筆になったものか疑問が生ずる。門人岡藤藤陰の頼聿庵宛ての書翰によると、「一昨年冬より昨年春にかけて八十余篇は成っていた」と報じられているので、恐らく八月九日より浄書作業に入ってから、朝鮮の役頃までの議論が書き加えられ、^③更に九月になって新たに豊臣増田租論の筆がとられたものと推定される。^④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ ㏀ ㏁ ㏂ ㏃ ㏄ ㏅ ㏆ ㏇ ㏈ ㏉ ㏊ ㏋ ㏌ ㏍ ㏎ ㏏ ㏐ ㏑ ㏒ ㏓ ㏔ ㏕ ㏖ ㏗ ㏘ ㏙ ㏚ ㏛ ㏜ ㏝ ㏞ ㏟ ㏠ ㏡ ㏢ ㏣ ㏤ ㏥ ㏦ ㏧ ㏨ ㏩ ㏪ ㏫ ㏬ ㏭ ㏮ ㏯ ㏰ ㏱ ㏲ ㏳ ㏴ ㏵ ㏶ ㏷ ㏸ ㏹ ㏺ ㏻ ㏼ ㏽ ㏾ ㏿ 㐀 㐁 㐂 㐃 㐄 㐅 㐆 㐇 㐈 㐉 㐊 㐋 㐌 㐍 㐎 㐏 㐐 㐑 㐒 㐓 㐔 㐕 㐖 㐗 㐘 㐙 㐚 㐛 㐜 㐝 㐞 㐟 㐠 㐡 㐢 㐣 㐤 㐥 㐦 㐧 㐨 㐩 㐪 㐫 㐬 㐭 㐮 㐯 㐰 㐱 㐲 㐳 㐴 㐵 㐶 㐷 㐸 㐹 㐺 㐻 㐼 㐽 㐾 㐿 㑀 㑁 㑂 㑃 㑄 㑅 㑆 㑇 㑈 㑉 㑊 㑋 㑌 㑍 㑎 㑏 㑐 㑑 㑒 㑓 㑔 㑕 㑖 㑗 㑘 㑙 㑚 㑛 㑜 㑝 㑞 㑟 㑠 㑡 㑢 㑣 㑤 㑥 㑦 㑧 㑨 㑩 㑪 㑫 㑬 㑭 㑮 㑯 㑰 㑱 㑲 㑳 㑴 㑵 㑶 㑷 㑸 㑹 㑺 㑻 㑼 㑽 㑾 㑿 㒀 㒁 㒂 㒃 㒄 㒅 㒆 㒇 㒈 㒉 㒊 㒋 㒌 㒍 㒎 㒏 㒐 㒑 㒒 㒓 㒔 㒕 㒖 㒗 㒘 㒙 㒚 㒛 㒜 㒝 㒞 㒟 㒠 㒡 㒢 㒣 㒤 㒥 㒦 㒧 㒨 㒩 㒪 㒫 㒬 㒭 㒮 㒯 㒰 㒱 㒲 㒳 㒴 㒵 㒶 㒷 㒸 㒹 㒺 㒻 㒼 㒽 㒾 㒿 㓀 㓁 㓂 㓃 㓄 㓅 㓆 㓇 㓈 㓉 㓊 㓋 㓌 㓍 㓎 㓏 㓐 㓑 㓒 㓓 㓔 㓕 㓖 㓗 㓘 㓙 㓚 㓛 㓜 㓝 㓞 㓟 㓠 㓡 㓢 㓣 㓤 㓥 㓦 㓧 㓨 㓩 㓪 㓫 㓬 㓭 㓮 㓯 㓰 㓱 㓲 㓳 㓴 㓵 㓶 㓷 㓸 㓹 㓺 㓻 㓼 㓽 㓾 㓿 㔀 㔁 㔂 㔃 㔄 㔅 㔆 㔇 㔈 㔉 㔊 㔋 㔌 㔍 㔎 㔏 㔐 㔑 㔒 㔓 㔔 㔕 㔖 㔗 㔘 㔙 㔚 㔛 㔜 㔝 㔞 㔟 㔠 㔡 㔢 㔣 㔤 㔥 㔦 㔧 㔨 㔩 㔪 㔫 㔬 㔭 㔮 㔯 㔰 㔱 㔲 㔳 㔴 㔵 㔶 㔷 㔸 㔹 㔺 㔻 㔼 㔽 㔾 㔿 㕀 㕁 㕂 㕃 㕄 㕅 㕆 㕇 㕈 㕉 㕊 㕋 㕌 㕍 㕎 㕏 㕐 㕑 㕒 㕓 㕔 㕕 㕖 㕗 㕘 㕙 㕚 㕛 㕜 㕝 㕞 㕟 㕠 㕡 㕢 㕣 㕤 㕥 㕦 㕧 㕨 㕩 㕪 㕫 㕬 㕭 㕮 㕯 㕰 㕱 㕲 㕳 㕴 㕵 㕶 㕷 㕸 㕹 㕺 㕻 㕼 㕽 㕾 㕿 㖀 㖁 㖂 㖃 㖄 㖅 㖆 㖇 㖈 㖉 㖊 㖋 㖌 㖍 㖎 㖏 㖐 㖑 㖒 㖓 㖔 㖕 㖖 㖗 㖘 㖙 㖚 㖛 㖜 㖝 㖞 㖟 㖠 㖡 㖢 㖣 㖤 㖥 㖦 㖧 㖨 㖩 㖪 㖫 㖬 㖭 㖮 㖯 㖰 㖱 㖲 㖳 㖴 㖵 㖶 㖷 㖸 㖹 㖺 㖻 㖼 㖽 㖾 㖿 㗀 㗁 㗂 㗃 㗄 㗅 㗆 㗇 㗈 㗉 㗊 㗋 㗌 㗍 㗎 㗏 㗐 㗑 㗒 㗓 㗔 㗕 㗖 㗗 㗘 㗙 㗚 㗛 㗜 㗝 㗞 㗟 㗠 㗡 㗢 㗣 㗤 㗥 㗦 㗧 㗨 㗩 㗪 㗫 㗬 㗭 㗮 㗯 㗰 㗱 㗲 㗳 㗴 㗵 㗶 㗷 㗸 㗹 㗺 㗻 㗼 㗽 㗾 㗿 㘀 㘁 㘂 㘃 㘄 㘅 㘆 㘇 㘈 㘉 㘊 㘋 㘌 㘍 㘎 㘏 㘐 㘑 㘒 㘓 㘔 㘕 㘖 㘗 㘘 㘙 㘚 㘛 㘜 㘝 㘞 㘟 㘠 㘡 㘢 㘣 㘤 㘥 㘦 㘧 㘨 㘩 㘪 㘫 㘬 㘭 㘮 㘯 㘰 㘱 㘲 㘳 㘴 㘵 㘶 㘷 㘸 㘹 㘺 㘻 㘼 㘽 㘾 㘿 㙀 㙁 㙂 㙃 㙄 㙅 㙆 㙇 㙈 㙉 㙊 㙋 㙌 㙍 㙎 㙏 㙐 㙑 㙒 㙓 㙔 㙕 㙖 㙗 㙘 㙙 㙚 㙛 㙜 㙝 㙞 㙟 㙠 㙡 㙢 㙣 㙤 㙥 㙦 㙧 㙨 㙩 㙪 㙫 㙬 㙭 㙮 㙯 㙰 㙱 㙲 㙳 㙴 㙵 㙶 㙷 㙸 㙹 㙺 㙻 㙼 㙽 㙾 㙿 㚀 㚁 㚂 㚃 㚄 㚅 㚆 㚇 㚈 㚉 㚊 㚋 㚌 㚍 㚎 㚏 㚐 㚑 㚒 㚓 㚔 㚕 㚖 㚗 㚘 㚙 㚚 㚛 㚜 㚝 㚞 㚟 㚠 㚡 㚢 㚣 㚤 㚥 㚦 㚧 㚨 㚩 㚪 㚫 㚬 㚭 㚮 㚯 㚰 㚱 㚲 㚳 㚴 㚵 㚶 㚷 㚸 㚹 㚺 㚻 㚼 㚽 㚾 㚿 㜀 㜁 㜂 㜃 㜄 㜅 㜆 㜇 㜈 㜉 㜊 㜋 㜌 㜍 㜎 㜏 㜐 㜑 㜒 㜓 㜔 㜕 㜖 㜗 㜘 㜙 㜚 㜛 㜜 㜝 㜞 㜟 㜠 㜡 㜢 㜣 㜤 㜥 㜦 㜧 㜨 㜩 㜪 㜫 㜬 㜭 㜮 㜯 㜰 㜱 㜲 㜳 㜴 㜵 㜶 㜷 㜸 㜹 㜺 㜻 㜼 㜽 㜾 㜿 㝀 㝁 㝂 㝃 㝄 㝅 㝆 㝇 㝈 㝉 㝊 㝋 㝌 㝍 㝎 㝏 㝐 㝑 㝒 㝓 㝔 㝕 㝖 㝗 㝘 㝙 㝚 㝛 㝜 㝝 㝞 㝟 㝠 㝡 㝢 㝣 㝤 㝥 㝦 㝧 㝨 㝩 㝪 㝫 㝬 㝭 㝮 㝯 㝰 㝱 㝲 㝳 㝴 㝵 㝶 㝷 㝸 㝹 㝺 㝻 㝼 㝽 㝾 㝿 㞀 㞁 㞂 㞃 㞄 㞅 㞆 㞇 㞈 㞉 㞊 㞋 㞌 㞍 㞎 㞏 㞐 㞑 㞒 㞓 㞔 㞕 㞖 㞗 㞘 㞙 㞚 㞛 㞜 㞝 㞞 㞟 㞠 㞡 㞢 㞣 㞤 㞥 㞦 㞧 㞨 㞩 㞪 㞫 㞬 㞭 㞮 㞯 㞰 㞱 㞲 㞳 㞴 㞵 㞶 㞷 㞸 㞹 㞺 㞻 㞼 㞽 㞾 㞿 㟀 㟁 㟂 㟃 㟄 㟅 㟆 㟇 㟈 㟉 㟊 㟋 㟌 㟍 㟎 㟏 㟐 㟑 㟒 㟓 㟔 㟕 㟖 㟗 㟘 㟙 㟚 㟛 㟜 㟝 㟞 㟟 㟠 㟡 㟢 㟣 㟤 㟥 㟦 㟧 㟨 㟩 㟪 㟫 㟬 㟭 㟮 㟯 㟰 㟱 㟲 㟳 㟴 㟵 㟶 㟷 㟸 㟹 㟺 㟻 㟼 㟽 㟾 㟿 㠀 㠁 㠂 㠃 㠄 㠅 㠆 㠇 㠈 㠉 㠊 㠋 㠌 㠍 㠎 㠏 㠐 㠑 㠒 㠓 㠔 㠕 㠖 㠗 㠘 㠙 㠚 㠛 㠜 㠝 㠞 㠟 㠠 㠡 㠢 㠣 㠤 㠥 㠦 㠧 㠨 㠩 㠪 㠫 㠬 㠭 㠮 㠯 㠰 㠱 㠲 㠳 㠴 㠵 㠶 㠷 㠸 㠹 㠺 㠻 㠼 㠽 㠾 㠿 㡀 㡁 㡂 㡃 㡄 㡅 㡆 㡇 㡈 㡉 㡊 㡋 㡌 㡍 㡎 㡏 㡐 㡑 㡒 㡓 㡔 㡕 㡖 㡗 㡘 㡙 㡚 㡛 㡜 㡝 㡞 㡟 㡠 㡡 㡢 㡣 㡤 㡥 㡦 㡧 㡨 㡩 㡪 㡫 㡬 㡭 㡮 㡯 㡰 㡱 㡲 㡳 㡴 㡵 㡶 㡷 㡸 㡹 㡺 㡻 㡼 㡽 㡾 㡿 㢀 㢁 㢂 㢃 㢄 㢅 㢆 㢇 㢈 㢉 㢊 㢋 㢌 㢍 㢎 㢏 㢐 㢑 㢒 㢓 㢔 㢕 㢖 㢗 㢘 㢙 㢚 㢛 㢜 㢝 㢞 㢟 㢠 㢡 㢢 㢣 㢤 㢥 㢦 㢧 㢨 㢩 㢪 㢫 㢬 㢭 㢮 㢯 㢰 㢱 㢲 㢳 㢴 㢵 㢶 㢷 㢸 㢹 㢺 㢻 㢼 㢽 㢾 㢿 㣀 㣁 㣂 㣃 㣄 㣅 㣆 㣇 㣈 㣉 㣊 㣋 㣌 㣍 㣎 㣏 㣐 㣑 㣒 㣓 㣔 㣕 㣖 㣗 㣘 㣙 㣚 㣛 㣜 㣝 㣞 㣟 㣠 㣡 㣢 㣣 㣤 㣥 㣦 㣧 㣨 㣩 㣪 㣫 㣬 㣭 㣮 㣯 㣰 㣱 㣲 㣳 㣴 㣵 㣶 㣷 㣸 㣹 㣺 㣻 㣼 㣽 㣾 㣿 㤀 㤁 㤂 㤃 㤄 㤅 㤆 㤇 㤈 㤉 㤊 㤋 㤌 㤍 㤎 㤏 㤐 㤑 㤒 㤓 㤔 㤕 㤖 㤗 㤘 㤙 㤚 㤛 㤜 㤝 㤞 㤟 㤠 㤡 㤢 㤣 㤤 㤥 㤦 㤧 㤨 㤩 㤪 㤫 㤬 㤭 㤮 㤯 㤰 㤱 㤲 㤳 㤴 㤵 㤶 㤷 㤸 㤹 㤺 㤻 㤼 㤽 㤾 㤿 㥀 㥁 㥂 㥃 㥄 㥅 㥆 㥇 㥈 㥉 㥊 㥋 㥌 㥍 㥎 㥏 㥐 㥑 㥒 㥓 㥔 㥕 㥖 㥗 㥘 㥙 㥚 㥛 㥜 㥝 㥞 㥟 㥠 㥡 㥢 㥣 㥤 㥥 㥦 㥧 㥨 㥩 㥪 㥫 㥬 㥭 㥮 㥯 㥰 㥱 㥲 㥳 㥴 㥵 㥶 㥷 㥸 㥹 㥺 㥻 㥼 㥽 㥾 㥿 㦀 㦁 㦂 㦃 㦄 㦅 㦆 㦇 㦈 㦉 㦊 㦋 㦌 㦍 㦎 㦏 㦐 㦑 㦒 㦓 㦔 㦕 㦖 㦗 㦘 㦙 㦚 㦛 㦜 㦝 㦞 㦟 㦠 㦡 㦢 㦣 㦤 㦥 㦦 㦧 㦨 㦩 㦪 㦫 㦬 㦭 㦮 㦯 㦰 㦱 㦲 㦳 㦴 㦵 㦶 㦷 㦸 㦹 㦺 㦻 㦼 㦽 㦾 㦿 㧀 㧁 㧂 㧃 㧄 㧅 㧆 㧇 㧈 㧉 㧊 㧋 㧌 㧍 㧎 㧏 㧐 㧑 㧒 㧓 㧔 㧕 㧖 㧗 㧘 㧙 㧚 㧛 㧜 㧝 㧞 㧟 㧠 㧡 㧢 㧣 㧤 㧥 㧦 㧧 㧨 㧩 㧪 㧫 㧬 㧭 㧮 㧯 㧰 㧱 㧲 㧳 㧴 㧵 㧶 㧷 㧸 㧹 㧺 㧻 㧼 㧽 㧾 㧿 㨀 㨁 㨂 㨃 㨄 㨅 㨆 㨇 㨈 㨉 㨊 㨋 㨌 㨍 㨎 㨏 㨐 㨑 㨒 㨓 㨔 㨕 㨖 㨗 㨘 㨙 㨚 㨛 㨜 㨝 㨞 㨟 㨠 㨡 㨢 㨣 㨤 㨥 㨦 㨧 㨨 㨩 㨪 㨫 㨬 㨭 㨮 㨯 㨰 㨱 㨲 㨳 㨴 㨵 㨶 㨷 㨸 㨹 㨺 㨻 㨼 㨽 㨾 㨿 㩀 㩁 㩂 㩃 㩄 㩅 㩆 㩇 㩈 㩉 㩊 㩋 㩌 㩍 㩎 㩏 㩐 㩑 㩒 㩓 㩔 㩕 㩖 㩗 㩘 㩙 㩚 㩛 㩜 㩝 㩞 㩟 㩠 㩡 㩢 㩣 㩤 㩥 㩦 㩧 㩨 㩩 㩪 㩫 㩬 㩭 㩮 㩯 㩰 㩱 㩲 㩳 㩴 㩵 㩶 㩷 㩸 㩹 㩺 㩻 㩼 㩽 㩾 㩿 㪀 㪁 㪂 㪃 㪄 㪅 㪆 㪇 㪈 㪉 㪊 㪋 㪌 㪍 㪎 㪏 㪐 㪑 㪒 㪓 㪔 㪕 㪖 㪗 㪘 㪙 㪚 㪛 㪜 㪝 㪞 㪟 㪠 㪡 㪢 㪣 㪤 㪥 㪦 㪧 㪨 㪩 㪪 㪫 㪬 㪭 㪮 㪯 㪰 㪱 㪲 㪳 㪴 㪵 㪶 㪷 㪸 㪹 㪺 㪻 㪼 㪽 㪾 㪿 㫀 㫁 㫂 㫃 㫄 㫅 㫆 㫇 㫈 㫉 㫊 㫋 㫌 㫍 㫎 㫏 㫐 㫑 㫒 㫓 㫔 㫕 㫖 㫗 㫘 㫙 㫚 㫛 㫜 㫝 㫞 㫟 㫠 㫡 㫢 㫣 㫤 㫥 㫦 㫧 㫨 㫩 㫪 㫫 㫬 㫭 㫮 㫯 㫰 㫱 㫲 㫳 㫴 㫵 㫶 㫷 㫸 㫹 㫺 㫻 㫼 㫽 㫾 㫿 㬀 㬁 㬂 㬃 㬄 㬅 㬆 㬇 㬈 㬉 㬊 㬋 㬌 㬍 㬎 㬏 㬐 㬑 㬒 㬓 㬔 㬕 㬖 㬗 㬘 㬙 㬚 㬛 㬜 㬝 㬞 㬟 㬠 㬡 㬢 㬣 㬤 㬥 㬦 㬧 㬨 㬩 㬪 㬫 㬬 㬭 㬮 㬯 㬰 㬱 㬲 㬳 㬴 㬵 㬶 㬷 㬸 㬹 㬺 㬻 㬼 㬽 㬾 㬿 㭀 㭁 㭂 㭃 㭄 㭅 㭆 㭇 㭈 㭉 㭊 㭋 㭌 㭍 㭎 㭏 㭐 㭑 㭒 㭓 㭔 㭕 㭖 㭗 㭘 㭙 㭚 㭛 㭜 㭝 㭞 㭟 㭠 㭡 㭢 㭣 㭤 㭥 㭦 㭧 㭨 㭩 㭪 㭫 㭬 㭭 㭮 㭯 㭰 㭱 㭲 㭳 㭴 㭵 㭶 㭷 㭸 㭹 㭺 㭻 㭼 㭽 㭾 㭿 㮀 㮁 㮂 㮃 㮄 㮅 㮆 㮇 㮈 㮉 㮊 㮋 㮌 㮍 㮎 㮏 㮐 㮑 㮒 㮓 㮔 㮕 㮖 㮗 㮘 㮙 㮚 㮛 㮜 㮝 㮞 㮟 㮠 㮡 㮢 㮣 㮤 㮥 㮦 㮧 㮨 㮩 㮪 㮫 㮬 㮭 㮮 㮯 㮰 㮱 㮲 㮳 㮴 㮵 㮶 㮷 㮸 㮹 㮺 㮻 㮼 㮽 㮾 㮿 㯀 㯁 㯂 㯃 㯄 㯅 㯆 㯇 㯈 㯉 㯊 㯋 㯌 㯍 㯎 㯏 㯐 㯑 㯒 㯓 㯔 㯕 㯖 㯗 㯘 㯙 㯚 㯛 㯜 㯝 㯞 㯟 㯠 㯡 㯢 㯣 㯤 㯥 㯦 㯧 㯨 㯩 㯪 㯫 㯬 㯭 㯮 㯯 㯰 㯱 㯲 㯳 㯴 㯵 㯶 㯷 㯸 㯹 㯺 㯻 㯼 㯽 㯾 㯿 㰀 㰁 㰂 㰃 㰄 㰅 㰆 㰇 㰈 㰉 㰊 㰋 㰌 㰍 㰎 㰏 㰐 㰑 㰒 㰓 㰔 㰕 㰖 㰗 㰘 㰙 㰚 㰛 㰜 㰝 㰞 㰟 㰠 㰡 㰢 㰣 㰤 㰥 㰦 㰧 㰨 㰩 㰪 㰫 㰬 㰭 㰮 㰯 㰰 㰱 㰲 㰳 㰴 㰵 㰶 㰷 㰸 㰹 㰺 㰻 㰼 㰽 㰾 㰿 㱀 㱁 㱂 㱃 㱄 㱅 㱆 㱇 㱈 㱉 㱊 㱋 㱌 㱍 㱎 㱏 㱐 㱑 㱒 㱓 㱔 㱕 㱖 㱗 㱘 㱙 㱚 㱛 㱜 㱝 㱞 㱟 㱠 㱡 㱢 㱣 㱤 㱥 㱦 㱧 㱨 㱩 㱪 㱫 㱬 㱭 㱮 㱯 㱰 㱱 㱲 㱳 㱴 㱵 㱶 㱷 㱸 㱹 㱺 㱻 㱼 㱽 㱾 㱿 㲀 㲁 㲂 㲃 㲄 㲅 㲆 㲇 㲈 㲉 㲊 㲋 㲌 㲍 㲎 㲏 㲐 㲑 㲒 㲓 㲔 㲕 㲖 㲗 㲘 㲙 㲚 㲛 㲜 㲝 㲞 㲟 㲠 㲡 㲢 㲣 㲤 㲥 㲦 㲧 㲨 㲩 㲪 㲫 㲬 㲭 㲮 㲯 㲰 㲱 㲲 㲳 㲴 㲵 㲶 㲷 㲸 㲹 㲺 㲻 㲼 㲽 㲾 㲿 㳀 㳁 㳂 㳃 㳄 㳅 㳆 㳇 㳈 㳉 㳊 㳋 㳌 㳍 㳎 㳏 㳐 㳑 㳒 㳓 㳔 㳕 㳖 㳗 㳘 㳙 㳚 㳛 㳜 㳝 㳞 㳟 㳠 㳡 㳢 㳣 㳤 㳥 㳦 㳧 㳨 㳩 㳪 㳫 㳬 㳭 㳮 㳯 㳰 㳱 㳲 㳳 㳴 㳵 㳶 㳷 㳸 㳹 㳺 㳻 㳼 㳽 㳾 㳿 㴀 㴁 㴂 㴃 㴄 㴅 㴆 㴇 㴈 㴉 㴊 㴋 㴌 㴍 㴎 㴏 㴐 㴑 㴒 㴓 㴔 㴕 㴖 㴗 㴘 㴙 㴚 㴛 㴜 㴝 㴞 㴟 㴠 㴡 㴢 㴣 㴤 㴥 㴦 㴧 㴨 㴩 㴪 㴫 㴬 㴭 㴮 㴯 㴰 㴱 㴲 㴳 㴴 㴵 㴶 㴷 㴸 㴹 㴺 㴻 㴼 㴽 㴾 㴿 㵀 㵁 㵂 㵃 㵄 㵅 㵆 㵇 㵈 㵉 㵊 㵋 㵌 㵍 㵎 㵏 㵐 㵑 㵒 㵓 㵔 㵕 㵖 㵗 㵘 㵙 㵚 㵛 㵜 㵝 㵞 㵟 㵠 㵡 㵢 㵣 㵤 㵥 㵦 㵧 㵨 㵩 㵪 㵫 㵬 㵭 㵮 㵯 㵰 㵱 㵲 㵳 㵴 㵵 㵶 㵷 㵸 㵹 㵺 㵻 㵼 㵽 㵾 㵿 㶀 㶁 㶂 㶃 㶄 㶅 㶆 㶇 㶈 㶉 㶊 㶋 㶌 㶍 㶎 㶏 㶐 㶑 㶒 㶓 㶔 㶕 㶖 㶗 㶘 㶙 㶚 㶛 㶜 㶝 㶞 㶟 㶠 㶡 㶢 㶣 㶤 㶥 㶦 㶧 㶨 㶩 㶪 㶫 㶬 㶭 㶮 㶯 㶰 㶱 㶲 㶳 㶴 㶵 㶶 㶷 㶸 㶹 㶺 㶻 㶼 㶽 㶾 㶿 㷀 㷁 㷂 㷃 㷄 㷅 㷆 㷇 㷈 㷉 㷊 㷋 㷌 㷍 㷎 㷏 㷐 㷑 㷒 㷓 㷔 㷕 㷖 㷗 㷘 㷙 㷚 㷛 㷜 㷝 㷞 㷟 㷠 㷡 㷢 㷣 㷤 㷥 㷦 㷧 㷨 㷩 㷪 㷫 㷬 㷭 㷮 㷯 㷰 㷱 㷲 㷳 㷴 㷵 㷶 㷷 㷸 㷹 㷺 㷻 㷼 㷽 㷾 㷿 㸀 㸁 㸂 㸃 㸄 㸅 㸆 㸇 㸈 㸉 㸊 㸋 㸌 㸍 㸎 㸏 㸐 㸑 㸒 㸓 㸔 㸕 㸖 㸗 㸘 㸙 㸚 㸛 㸜 㸝 㸞 㸟 㸠 㸡 㸢 㸣 㸤 㸥 㸦 㸧 㸨 㸩 㸪 㸫 㸬 㸭 㸮 㸯 㸰 㸱 㸲 㸳 㸴 㸵 㸶 㸷 㸸 㸹 㸺 㸻 㸼 㸽 㸾 㸿 㹀 㹁 㹂 㹃 㹄 㹅 㹆 㹇 㹈 㹉 㹊 㹋 㹌 㹍 㹎 㹏 㹐 㹑 㹒 㹓 㹔 㹕 㹖 㹗 㹘 㹙 㹚 㹛 㹜 㹝 㹞 㹟 㹠 㹡 㹢 㹣 㹤 㹥 㹦 㹧 㹨 㹩 㹪 㹫 㹬 㹭 㹮 㹯 㹰 㹱 㹲 㹳 㹴 㹵 㹶 㹷 㹸 㹹 㹺 㹻 㹼 㹽 㹾 㹿 㺀 㺁 㺂 㺃 㺄 㺅 㺆 㺇 㺈 㺉 㺊 㺋 㺌 㺍 㺎 㺏 㺐 㺑 㺒 㺓 㺔 㺕 㺖 㺗 㺘 㺙 㺚 㺛 㺜 㺝 㺞 㺟 㺠 㺡 㺢 㺣 㺤 㺥 㺦 㺧 㺨 㺩 㺪 㺫 㺬 㺭 㺮 㺯 㺰 㺱 㺲 㺳 㺴 㺵 㺶 㺷 㺸 㺹 㺺 㺻 㺼 㺽 㺾 㺿 㻀 㻁 㻂 㻃 㻄 㻅 㻆 㻇 㻈 㻉 㻊 㻋 㻌 㻍 㻎 㻏 㻐 㻑 㻒 㻓 㻔 㻕 㻖 㻗 㻘 㻙 㻚 㻛 㻜 㻝 㻞 㻟 㻠 㻡 㻢 㻣 㻤 㻥 㻦 㻧 㻨 㻩 㻪 㻫 㻬 㻭 㻮 㻯 㻰 㻱 㻲 㻳 㻴 㻵 㻶 㻷 㻸 㻹 㻺 㻻 㻼 㻽 㻾 㻿 㼀 㼁 㼂 㼃 㼄 㼅 㼆 㼇 㼈 㼉 㼊 㼋 㼌 㼍 㼎 㼏 㼐 㼑 㼒 㼓 㼔 㼕 㼖 㼗 㼘 㼙 㼚 㼛 㼜 㼝 㼞 㼟 㼠 㼡 㼢 㼣 㼤 㼥 㼦 㼧 㼨 㼩 㼪 㼫 㼬 㼭 㼮 㼯 㼰 㼱 㼲 㼳 㼴 㼵 㼶 㼷 㼸 㼹 㼺 㼻 㼼 㼽 㼾 㼿 㽀 㽁 㽂 㽃 㽄 㽅 㽆 㽇 㽈 㽉 㽊 㽋 㽌 㽍 㽎 㽏 㽐 㽑 㽒 㽓 㽔 㽕 㽖 㽗 㽘 㽙 㽚 㽛 㽜 㽝 㽞 㽟 㽠 㽡 㽢 㽣 㽤 㽥 㽦 㽧 㽨 㽩 㽪 㽫 㽬 㽭 㽮 㽯 㽰 㽱 㽲 㽳 㽴 㽵 㽶 㽷 㽸 㽹 㽺 㽻 㽼 㽽 㽾 㽿 㿀 㿁 㿂 㿃 㿄 㿅 㿆 㿇 㿈 㿉 㿊 㿋 㿌 㿍 㿎 㿏 㿐 㿑 㿒 㿓 㿔 㿕 㿖 㿗 㿘 㿙 㿚 㿛 㿜 㿝 㿞 㿟 㿠 㿡 㿢 㿣 㿤 㿥 㿦 㿧 㿨 㿩 㿪 㿫 㿬 㿭 㿮 㿯 㿰 㿱 㿲 㿳 㿴 㿵 㿶 㿷 㿸 㿹 㿺 㿻 㿼 㿽 㿾 㿿

まさに言葉の十全な内包において、外史の「延長」なのである。換言すれば経験に学ぶという「実」よりの思考出発が、この両者をつなぐかけ橋だったと言えよう。だから、差し当って、この「実」を中核とした論理構図こそが、これら九十二の論贊を貫いていたものであるとの作業仮説を論贊所説へのアプローチに際してたてることができよう。試みに政記論贊から任意抽出的にその第十七^⑭、第八十九^⑮の二つをとりあげ、所説の具体相を垣間見ることにしよう。

ところで、前者は藤原氏専横に関しての大方の非難、後者にあつては豊臣秀吉天下征覇の因が土地、金帛、高爵、顯位を惜しみなく与えたとする見解をふまえて、それぞれに反論を加え、否定への肯定定立といった屈折によって山陽自身の考えを展開批瀝する、極めて個性的な立言の場をなすものである。それはまた彼が病の床にあつて孜々として完成の筆を執っていた書物の一つ書後題跋^⑯でくりひろげた一連の批評と連なるものであつた。例えば姑らく諸伝を闇き独り正文を熟観することの要を力説して徒らなる博学への大全蒙引の輩の古訓に博きなる耳で真に博きに非ざる^⑰所以を説き、注にふりまわされて本末顛倒の弊に陥っている今に在りて経を治むる者を四病に罹つたものと断ずる^⑱警世の文などはまさに先ず聖書に拠るべき旨を説く宗教改革者マルティン・ルターの姿を髣髴とさせ、これら書後題跋で示されたところは他説の蒙を啓く、何よりも自己の良心に忠実ならんとする強烈な自主的経験の吐露であると思得るであらう。この経験告白こそがまさしく外史論贊と政記論贊の底脈をなすものであり、特に後者は前者に比して記事との関連で遙かに厚味をもたせられ、更に襄曰不然^⑲といった、断定的な表現による自説展開と相俟って、書後題跋に望見される経験告白に近いものをもち、それだけに自信をもって自主的経験の集約が語られているのである。つまり、政記論贊にあつては山陽の経験告白、経験領域の定位が外史論贊よりもはるかに確たるものとなつたことが窺わ

れるわけである。従って、この定位を完了した山陽の経験論たる「実」を中核とする時、政記論賛は外史よりは書後題跋との牽連性を多分に有し、そういった意味においての延長なのだといえよう。

こういった自信をもった山陽の体系的完了態、ここに政記論賛の特色が存し、その点で外史は中村真一郎氏が引用されている、実、用、大義の三大支柱より成る彼の体系形成への道程であり、政記は、体系定位からみたフィードバックだったとも考えられよう。延長のもつ意味はこういったものだったと推測されるのであり、これが、より具体的になったここでの私の作業仮説をなすのである。

ところで、後述するところで明らかにされるように山陽の強烈な個性は自分だけの経験王国をつくらせた。だが、かかる経験領域の形成に連なる「実」への着目はあくまでも山陽自身の人格に関わるものであって所詮は構造的に公と私を峻別する論理化を欠く限りにおいて、公私の混同を免れぬ底のものであった。だからこういった経験が形づくられる個人格というトポスのもつ私的な側面を超克して、これに公民権を賦与してゆく支えが是非とも必要であり、これを求めての苦闘の使徒順礼がまた山陽のノイローゼ症を規定する一要因だったのである。⁽²⁸⁾ここで私見を挾ませてもらえるなら、本来的にいつて個と私とは同一集合ではないと考えられる。私自身としては構造化された個、個の中にある曰く言い難い所与の近似化的論理式の形成を介して公と私とはかかる構造個にあって、それぞれ定位さるべきものであると見るからである。つまり個はこの公、私の二つのモメンテを包摂しているわけである。だが、従来はこういう論理式構成の前提条件が見落され、ために個内での公、私定位は達成されるに至っていない。この個のいわば一般理論ともいふべきものの欠落が、また個と私を同視させ、こういった不十分な未完状況を基軸として、思想類型をかかる一般への近似を後景化することによって特殊性をより前面に出させる基因を醸成しているのである。ここ

で光をあてている日本の思想類型もかかる特殊面強調の一類型なのであり、とりわけモンスーンの風土によって規定され、個人の自覚を必要とせぬ感情融合的な共同態を基底とした隔てなき間柄^②が一つのメルクマールとなっているものなのである。和辻博士が指摘されたようにそこでのそとは個の外ではなく一義的に家のそとであるような個の内への通路が閉塞されている状況、つまりカント的な我が内なる道德律への回路をもたぬ、独特な個閉塞、これが自主的経験集約による経験論形成の旅立ちをした山陽を迎えたものだったのである。個は私であるにとどまらず、滅私奉公でさえあったのである。それだけに自己の人格にトポスをもつ自主的経験の直視と定位とは西欧と異った方向を辿らざるを得ず、またそれゆえに、もっと重い荷を課することになったといえよう。つまり「実」の確立、その私的性格の払拭は、最初の時点より、個よりはねかえされた形で行われねばならず、そこに山陽の試行錯誤の苦闘が存した。個そのものに私的なものを超克する基底がルネ・デカルトの如く求め得られぬとすれば、大義たる「道」による他はない。だが、自己の経験拡張に比重をかける限り、安易に大義に転ずることは許されぬ。このいわば忠孝二途に惑ふ重盛の心情に似たものこそ、マルティン・ルターたる山陽に担わされた重荷であった。頼山陽の生きた時代である幕藩体制の動揺期はまさに商業の復活によってヨーロッパが近世の産褥期を迎えたルター時代の日本の模写でもあった。山陽の生みの苦しみは続く。こうして個内へのベクトルを個内通路閉塞によって閉ざした日本の状況に対応して、ルターの聖書への転換に相似た形をとりながら、この必然的な大義へのベクトルを更にもつと原点へ遡らせ、まさに原典への遡及によって、拡げられ、膨らせらるべき経験を包摂し得るように大義そのものを、より原点にまでのベクトルで先ず拡張することになるのである。こうして山陽は自己経験定位のために、個よりはねかえされたベクトルを対位的に大義の側よりはね返ったものとして、いわば二重の屈折を果たし、経験の膨みを大義の拡張とし

て観念すること、この重荷よりの脱出路を探し当てることになったのである。「実」への着目から出発した山陽の経験批判論体系の形成はかかる大義との対位法によって日本的思想構図状況下での経験論を楽譜化したと言つてよいのである。そこで山陽が大義又道について説くところに目を向けることにしよう。

扱て、政記論賛で彼は常にこういった道の観念とその内包をその叙述に際してふまえていたが、明示的には論賛第六、第七、第十七、第二十五、第三十七、第四十一、第四十二、第六十三、第六十五、第七十五、第七十九、第八十二、第八十七など^{②⑤}でいかなるものを語っている。これらの論賛によると道は同時に天行、天道、天、天運であり、天下の道として一つであり、自然に存し、人作を待つに非ざる公道としてすべてを知り、すべてを発し、天行として自ら変じ、また万物を支配する人の観る可からざる天道であることがわかる。だから、ここで山陽は己れの家学たる日本朱子学^{②⑥}の伝統にたつて大義又道を観念しているわけである。

ところで、この日本朱子学は中国朱子学を日本的プラグマティズムによる「実」に適合するように修正を加えたものであった。このために道は人作を排除した、観る可からざるものとして、それ自体不可知なものと見られたのである。そこにまた経験的「実」領域に重きをおく、いわば「実」を軸にした山陽が個内回路閉塞状況にある日本的思想構図にあって、個内へのヴェクトルを道の側よりのものに屈折させた時の難問があった。経験主義に傾斜していた山陽は、それゆえにこそ「道」を超驗的なものと観念せざるを得なかったのであり、この観る可からざる道をいかにして見得るものとなし、同時に経験の拡張と対応するふくらんだものたらしめるかの工作が必要であり、いわば「道」よりの屈折反射によって前門の虎を斥けた山陽をこの課題が後門の狼として待ちうけていたのである。この二重の重荷こそ経験領域の拡張を軸にした山陽の体系構成の過程で彼にのしかかったものであり、外史への道はかかる旅だつ

たわけである。²⁸ こうして、山陽が至りついたのは、“実”、“道”又“大義”と並んで、否この二つを接合する第三の觀念である。“用”の発想であつた。彼は、媒介作用を果す、すぐれて動態的な觀念である、この用を巧みに操ることによつて超驗的な道と經驗の場である実の二極を、それぞれ道の用、実の用として結びつけ文字通り經驗主義的体系をつくりあげること成功したのである。では、第三の支柱否体系の基軸をなす“用”を彼はどう見ているか、この点に目を向けることにしよう。

ところで、既述したように道は自ら動くがあくまでも經驗の埒外にあるものである。だから可視化されるには人事が必要であり、天が万民を託する先王の道にならねばならぬ。²⁹ それが文雖外来而其实固在我といった祖宗先王の典に³¹ 他ならぬのである。祖宗によりて己れに取りて用いられることになった、³² まさに道の用として我が列聖の伝うところ、為すところたる王業として觀念されねばならなかつたわけである。山陽が自らの自主的經驗領域に市民権を賦与するために強いられた苦闘は、道への対極的な反射を経て、不可視の超驗的な道を可視化する人事である、かかる先王の典、祖宗の法、³⁴ その徳沢紀綱としての道の用たる本質を具えた王業に至りつかせたといつてよい。³⁶

扱て、かかる王業は我が邦にあつては万国に度越し、³⁸ 廻かに唐業に別れ、³⁹ 外国に過絶した他の追隨を許さぬ内容を具備した、極めて広い内包性を賦与され、拡張性を帯有しているものであることは言を俟たぬがそれにしても、衰⁴¹ ることもあり、天の聴さぬ、⁴² 本末の顛倒する可能性をもつものである。⁴³ つまり天が謬ることなく喪心の人を以て乱を極めしむる絶対性万能性をもたせられるのに対して天の与みすることのない、⁴⁵ 公道に悖つた私を挟む余地ある次元であり、その本質において“実”の、より正確に言うならば実の用たる性格がその底に沈澱した領域をなすのである。⁴⁷ つまり、自主的な經驗集積を軸として、父春水はじめ当時の諸儒に対して、自由な立場をとつた外史氏山陽は元来コ

ギト・エルゴ・スム的な視座にたち、イギリス経験批判論とも共軌性をもっていた人であった。併し、個内での経験をそのまま分化してゆくことを許さぬ個内閉塞的な日本思想構図は彼の前に「方法叙説」への道を開かなかった。このために山陽はこの個内へのベクトルを内へ浸透させず、これを阻む強靱な日本的皮膜の抵抗にあつて、ここで反射させ、この反射ベクトルを基軸にして独自の経験領域たる「実の用」次元を指定する以外、とるべき方法はなかったことになるのである。だが、これでは未だ公民権を賦与せらるるには不十分であつた。だから、この皮膜で屈折した基ベクトルを道よりの反射として再度反転せしめる必要があり、用は道の用、実の用の二層をもつ、実と道の接合領域として対位法的な、実と道の和音としての意味を与えられることになるのである。こうして、伝統的な道に立脚しながら、自主的経験領域が、その拡張性ともども、まさに経験として包摂される見事な体系が構成されるに至つたといつてよいのである。それはまた日本朱子学の成果と考えられるものでもあつたわけである。つまり、この用の概念は朱子の中庸章句に『達道なる者は道の用なり』といつた表現に見られるものであり、儒学の中に一種の苦塩のように摂取されたものであるが、山陽はこういった日本思想に特殊な状況にあつて、このいわば二重の反転を行なうために、この用の觀念をこのような形で巧みに操つたといえるのである。このような実と道その媒介項たる実の用と道の用、これによつて山陽は経験論に傾くものとして、自分のプラグマティズム的希求を満足させたものと見ることができるのである。彼の思想体系はここで完成された。従つて外史に代表されるものは、山陽のかかる「実」をふまえ、それよりの出発を行なつた、「実」定位のかかる体系への模索の歩みであり、「実」への眼、未だ定位されない体系ゆえにここでは「論」を記事の圧倒的な量の中に埋没させざるを得なかつた。これに対して、政記では明らかに「論」が前面化しており而も既に述べたように襄曰不然といった断案が示すように自信をもつて語られている。

この意味で政記は単に外史の補卷としての延長ではなく、体系よりのフィードバックであり、体系からの回顧ともいふべきものをもっていたといってもよいのである。山陽はこの「実」、「道」並びにその対位構図での媒介的動態觀念たる日本プラグマティズムによって修正された「用」の三つによって政記外史を貫く想念体系を構成し、この用に道への近似性によって先王の典、武治といった現象形態を配列し、幕藩体制動揺期に対応できる武器をかける弾力性を帯した私経験の公経験への轉換によって備えるに至るのである。

ところで、この先王の法、王業、王政、朝政⁵⁰のもつ内容は明らかに儒学的である。それらは元来超越的不可認識なカントの「物自体」にならざるべきことのできる「道」が人心、人事によって可視化されたものであつて内包的には儒学的価値觀に近似したものととして觀念されねばならなかった。「道」は道の用として天を継ぎ民に君たる道に仁信明武⁵¹を具えたるものとして轉化し、また天民の為君を立つるであり君自ら儉して民を養い民富めば則ち君富む⁵²という内包をもたせられることで孔子の務民之義⁵³に接するのである。儒学的な合理主義が山陽の自主的経験論体系構成の支柱であつた。このために諉之過去之報⁵⁴とする、荒鴻まで遡って不可知なものを可知的なものに移行させる因縁論的な仏説に對しては極めて批判的な態度⁵⁵をとり、儒学から経験へではなく、逆に経験より儒学への方向をふまえているとはいへ敬鬼神而遠之⁵⁶といった枠は守るのである。この儒学のもつ人間主義、合理主義への、かかる意味で山陽が示した執着は自主的な経験論者、プラグマティストとしての彼の顔をのぞかせるものだったのである。こうして彼はその独自の経験領域たる「実」を道の用として経験の彼方にある「道」と接合し、この本来的には実の用に他ならぬ道の用として、かかる儒学的価値を内容とした先王の典令をこの「道」の本質に近い現象形態である⁵⁷と觀念するのであり、だからこそ先王の「道」とするのである。山陽はかかる内包をもつ道の用、実の用による「用」の立体構成によって、民

あれば則ち君ありといった本にたち人民を服さしめる公且誠なる順道の用として道への近似性を帶有した実の用たる公の用と、この本末を顛倒して君のために民ありとして、この道より隔った悖道の用、非道の用、私の用たる実の用をこういった用複合体に位置づけ、これを武器として経験の整理を行ない得るに至ったのである。こういった「経験批判論」、これを駆使してロック並みに特に政事現象について治政に役立つ知慧を体系的に展開したのが政論の書日本政記論賛の所説だったと言い得るであらう。

だから、日本政記で山陽が示した「格率」はこういった彼独自の用複合体的視座によって既に体系づけられたものだったわけである。そこで敢えて重複を避けないで、山陽の用複合体を断層的に語る政論格率の主なものだけに目を向けることにしよう。先ず複合的視点と対応した、積極的なもの、消極的なもののうち前者から入ってゆこう。

山陽は、政事が常に道に則した国本にたち天造に任せる必要のあることを強調する。これこそ彼の格率集の総則ともいうべきものである。山陽はここから他の格率を導出する。こうして民こそ君という魚にとって水ともいうべきもの、従って天下の物を収めてこれを天下に支配し、国と民相須ちて存することに徹し民に取ること廉であるべきであって、農を尊び、兵の本である農時を失わざるよう配慮し、民を済うことに勤めることこそ肝要であるとして各則の基幹ともいい得るものを説くのであり、特に租に着目する。このための条件としては出づるを制することが何といっても不可欠であり、是非とも吏を立つことは簡でなければならぬ。また行動にあたっては公且誠なる士大夫を遇し、天下の士たるべきものを養成すべきであり、事に臨んでは天下の正に出て己れこれに与らざるよう心がけ、小成に甘んぜず、常に足らざるを憂う大なる心をもち、得失を考慮し利を興して害を招かぬ周到な心くばりを薬の配剤に譬えて説き、状況の総合的判断に立った大局的全体把握をするよう奨めるのである。従って、これらの裏が消極的格

率であり、心して戒めねばならぬものとなるのである。つまり、こういった道の本を顛倒して、人事の継続に反し、⁽⁷⁷⁾天下の物を収めて己れの有となして私を公道に挟むこと、⁽⁷⁸⁾更には故常のみに拘泥し、⁽⁷⁹⁾まさに小私による判断によって、私欲のみの満足である奢侈、好色に耽ることを排するのである。⁽⁸⁰⁾まことに政事の乱れは、こういった君私に循うところ⁽⁸¹⁾に胚胎するとみるわけである。

ところで、簡単にその大要のみを紹介した日本政記の格率集は山陽が“道”と“実”を両極として、日本思想構図に嵌合させた経験論体系である、用の複合的な構成の濾過を経た彼の自主的な読書と体験によって得られた経験の集積である。かかる意味において、これらの格率は“道”、“実”、“用”の三つの観念を支柱とした山陽論理体系の端的な表白であり、道、実の両極への近似座標によって道の用、非道の用を配列し、偏差的な階程に整序された経験なのである。自我的、自主的経験とその定位化より出発した山陽の外史からの思考遍歴はこういった経験領域を特殊日本的に組み込むための体系をかかる形で構成させたのである。つまり、こういった西欧とは異なった独自の経験批判論体系指定の方向にあって数々の苦闘を山陽に強いつつ、かかる道を歩ませたのは、個内回路閉塞に一つの露頭をみせていた日本思想構図であった。⁽⁸²⁾そこには五木寛之氏が日本重層文化の可能性で指摘されている、この日本思想伝統の作動があったといってよい。そこで、視点を表層から深層に移し、山陽における体系構成の歩みを、これまでとは逆に深層での作動より辿ってゆくことにしたいのである。

II 論賛所説の底層的メカニズム

山陽がこの論賛叙述にあたつて特に襄曰不然といった極めて断定的な表現を用いて、彼にとってまさしく所与の論に痛烈な批判を浴びせていることに關しては既に指摘したところである。例えば論賛第八十八で織田右府弑殺の因を臣下処遇の礼なきに求める意見を『不可以平世之意律也』として斥け、^①論賛第七十九で全般的に弑殺にあらう者の条件を吟味し、人の情への対応に恩意と威権のいずれかを欠くことをつきとめ、この両者を具える必要を説いて、まさに相関的な行動の強調を行なっている。更に人心の趨くところの明白な洞察の要、全体的な把握の肝要なことを『兵有形 有勢 有機 生勢 勢生機機者難見而易変者也』^④といった見方と関連させて、冷徹なレアリストの眼を覗かせ、随処に独自の見解を開陳している。これらは山陽が「実」について強い執着をもち、自主的経験論者たらしめた歷程の成果でもあったといえよう。日本政記で山陽が日本外史での記事、論賛といった配列形式をほぼ踏襲したのは、記事に掲げられた経験よりの一つの帰納が論賛だったからであり、そこには自分の意思の通らぬ時必ずヒステリーを起して正気を失うほど強烈であった自意識過剰ともいえる山陽の氣質の延長である経験へのマニアが覗いているといつてよいだろう。彼はこういった自己の個性的な経験主張のため、一生在野の人として、^⑧家を捨て親を棄てて過し、^⑨大阪生れで芸州育ちの江戸っ子たらしめた。^⑩彼は論賛第四十四で棄官の憲清と同じく自由人たることを欲し、而もマニア的な蒐集家の顔に見られるよう、あくまでも自己に忠実な我儘者、^⑭まさに自己自身へのマニアであった。彼はこういった意味において自己にとっての外的な所与世界への適応順化に不器用な、どこまでも自分への癡癖、自身へ

の子供っぽい執着をもち続けた、あまりにも自意識過剰ともいえる性格の持主であった。これが山陽の独自の経験論形成の出発点をなすものであった。かかる内なる城をもっていた彼は環境へのお仕着なものでなく、まさに「自分の対応をみせ、貴重な宝としての一種の個経験領域を形づくっていた。これこそが、彼の生きた幕藩体制動揺期であったシュトルム・ウント・ドランクの時代に自らを貫く参加の文学者たらしめ、この個経験の拡張を課題として担わせることになった。そこに既述したような山陽の苦闘が強いられる基因が存したのである。」

ところで、年譜で明白な如く安永九年（一七八〇年）十月二十七日に大阪江戸堀で生れ、天保三年（一八三二年）九月二十三日京で生涯を閉じた山陽は、安永、天明、寛政、文化、文政、天保にわたって、日本社会にとっての変動の半世紀^⑮を生きた人であった。明安と包括される明和・安永年間に、従来の幕藩体制の支えであった本百姓制度は解体の方向を辿り、それに伴う様々な変化を呈し始めていた。^⑯つまり、こういった動きは聚斂の新法起り、国々の代官等培克の所為多かりきといった表現に見られるように幕府経済政策の転換を促がすことになった。こうして支配者よりは支配される側の立場に目を向けぬと、その全体像把握が歪められ、生々とは描出されぬ化政期到来の跫音がきこえてくることになるのである。

かかる時代の新気運ともいうべきものはまたその母斑を文化にも捺すことになった。純粋な哲学的研究よりは寧ろ現実社会分析の具となり、近代的な個人主義的人生観に転成してゆく実用主義儒学、^⑰儒学から独立し、特に化政期における寛斎一派の新詩運動に見られる官能の解放と内心吐露を自由にした詩文の動き、^⑱文政から天保にかけて純粹抒情詩として頂点を極める江戸の詩、^⑲化政期漢詩人たちが帶有するに至ったジャン・コクトーにも比肩できる感受性が^⑳その妍を競った。またこのころの儒者は国史に関心をよせ、^㉑阿部正弘の見せた男女共学の理想、^㉒寛政以後高等教育の

普及による早熟児の簇生などは我が邦の時宜に適すればよしとする自由な心情の断面であり、男女の愛情をも対等なものとする新時代、^⑳個性的なものの中にひめた、^㉑まことに真は新と^㉒いった時代の到来を端的に物語るものであった。それはまた自己の自主的な経験が襁褓を脱して一人歩きする、否一人歩きさせねばならぬことを意味していた。既に人一倍自意識の強かった山陽の自己経験への執着は、こういった時代の新潮流によっていやが上にも増幅されたといつてよいのである。彼はマルティン・ルターであり、ルネ・デカルト、ジョン・ロックとなつた。だが、彼はこの自主的な、また拡張のヴェクトルをもつ経験領域を西欧とは異なつた日本の思想的風土にあつて定位し、体系化せねばならなかつた。山陽が政記論賛で語る『夫鷲鳥欲搏^㉓』といった経験論形成の歷程を既に指摘したような個内閉塞状況の一つの露頭とした本邦の思想構図の中で辿らねばならず、その定位論そのものにかかる日本的構図の作動軌跡があつたといえよう。

扱て、かかる経験は一義的にみると個の領域にあつて形成され、而も『真は新なる』新しさ、つまり拡大性をもたせられる限りでは、所与の規矩準繩の手にあまるものであり、それだけに個の内面に埋没さるべきものであつた。だから、こういった新しい自主的経験領域の定位論たる経験批判論はイギリスのジョン・ロックからディヴィット・ヒュームまでの歩みと重なるものを有していたといえよう。つまり深層的には彼らと同一の課題を背負わされていたわけである。^㉔だが、非ヨーロッパ的な日本思想構図は西欧と異なつた生みの悩みを山陽に与えた。特に豊葦原瑞穂の^㉕国、うまし国と見る日本的発想は罪に関してヨーロッパの原罪観をもつことはなかつた。^㉖これこそ和辻博士が風土で指摘されるような、日本人に存する特殊な存在の仕方を基底にした人間の全体性把握の特殊日本的なもの^㉗のハイマートであつた。日本のモンスーンの風土は世界と一応隔絶した内としての個領域の成立を我々に許さなかつた。これ

が日本国民の特殊性であり南博氏のいう日本の自我の景觀であつた。⁽³⁸⁾このデカルトのコギト、イギリスの經驗批判論展開が示すような個内への立入りをトポス的に認め、市民権を与えてゆくことをせぬ、いわば一種の個内閉塞状況こそが、日本の思想風土をなすものだったのである。⁽³⁹⁾この日本の自我が新しい自主的經驗領域定位をめざす山陽にとつての前門の虎だったのである。新しさゆえに貴族的武士とはちがったその出自ゆえに庶民的生活感覚を身につけながらも、息子へのコンプレックスも手伝つて、山陽に無理解な眼を向けた父春水に抵抗してまで自らを囲む外なる所与に背を向けて踏みこんだ自己經驗、内なる個への旅は、かかる個内への立ち入り禁止を命ずる日本的な思想の特殊状況によつて一応の挫折を余儀なくされたわけであつた。このために彼の自主的經驗へのマニアはいわばデカルト的回路を閉ざされ、演釈と帰納の狭間にあつて、宿無しになつた。個人的なかかる真は新的な經驗定位に當つての、こゝろといった日本的自我景觀下でのアポリアが潜在意識の固着とその不充足を生み、彼に幼少年期以来鬱躁の両面をもつたノイローゼ症状を惹起させたのであり、この挫折を軸にした内面をめぐる「野戦」で勝ち得た名与の勲章というべきものであつたといえよう。それは所与への自らの閉塞と個内に開かるべき回路の日本の自我による滅私奉公的な閉塞とのいわば二重の閉塞状況におかれた、独自の「実」形成に「実」より出発した山陽の迷いの表白でもあつた。經驗領域の個内展開を阻む日本の自我の厚い皮膜は彼を外へはね返すことになつた。そしてまた、この反射したヴェクトルは彼自身の所与への抵抗と相俟つて、所与からものはね返されるという乱反射を生じこれこそ彼を苦しめたものであつた。山陽が日本外史との取り組みにあたつて、特に記事と深く関わつたのも、種々の可能性の芽を歴史への没入によつてつみとつたのだと中村真一郎氏が自らの體驗に則して述べられているノイローゼ克服の便法⁽⁴⁴⁾というよりは、讀書による經驗集積を通じて、自らの經驗をもっと客觀的に拡がったものとするこゝで「実」をこの乱反射状況のもと

でも一度はつきりと見据えるための努力であったとはいえないだろうか。こうして外史の叙述過程にあって事実よりの帰納経験の定位をはかった山陽にとって、かかる“実”の“理”たる条件を具備したものが家学として親んだ儒学の百科全書的な性格、その弾力性であった。⁽⁴⁵⁾中村真一郎氏が指摘される如く儒教的倫理、価値観の内実よりも寧ろ本能的ないわば自己の性格に連なるものをもっていた自己の経験領域との邂逅という山陽にとっての“地理上の発見”⁽⁴⁷⁾は思弁研究よりは現実社会分析の具へと実用主義的脱皮と転換を果しており、著しく実務色を濃くしていた寛政期儒学思潮をふまえた、この実用的儒学を利用することによって、“実”から“道”へと反転され、道との対極構図をなすに至ったことについては既に触れた。日本の自我はここでかかる反転を朱子学の日本化ともども強いることになったのである。だが、前にも述べた如く、そこに後門の狼がいた。すなわち、儒学のもつ合理主義的な人間主義は道そのものを観るを得ざるものとして超驗的なそれ自体不可知なものであるとする他なかったからである。いかにして超驗的な“道”が“実”の支えとなり得るのか。アポリアの虎狼は山陽を解放して呉れなかったといつてよい。この時山陽に閃いたのは、朱子の用觀念と接合しながらも、朱子学を日本的な朱子学⁽⁵⁰⁾として実用化した日本の思想構造であった。まさしく現象論的な觀念としての“用”の発見発明だったのである。だから、それは我が邦固有の先王の道、祖宗の法でなければならなかったのである。こうして山陽を救ったのは、儒学というよりは、かかる仲尼の教えの底を流れる、彼を挫折の状況におき、苦しめた日本の思想構図であったといえるのである。まことにかかる“用”、その“実”と“道”の両極間のスペクトラム的配列構成によって、“実”は“道”を軸にした同心円に“実の用”の“道の用”への転化を介して包摂されるのである。こうして“実”はこの同心円にスペクトラムを異にした周縁として定位され、山陽の特異な日本的経験批判論は体系化を見るに至るわけである。山陽から放蕩児の顔が消え、生活的にも地

味な時期を迎えるに至ったのは外史を仕上げてのことであつたとの中村真一郎氏の指摘は肯綮を得たものであつて、山陽のいわゆる鎮静期はかかる日本的思想構図内に定位された経験論体系の完成と対応するのである。山陽に見られる人生のひとつの大きな宿場を通り過ぎたという自覚と安堵めいた落着きとはこれと関わるものであつた。宋儒の説であるとして所説を平然として却けていた従来の山陽にとって代って、空疎な高言を吐くことを弟子たちに向つて警め、実践的な行動では体制順応主義者として、昌平校の教壇に古賀侗庵とともに立つことを夢みた、いかなる反逆をも志さぬ体制内の人間としての一生の上り方を考える倒幕を目ざさぬ尊王論者山陽に見るその晩年の像はただ単に処生感覚の発達によって反体制的な自由よりも体制内での自己実現をはかり、体制に即して内的な自由を維持してゆくという現実打算的な態度によるだけではない。そこには日本的な伝統思想構図がもつ同心円的な拡張弾力性を作動させて、自らの自主的経験を定位させしめるに至り、図式の変革ではなく、その原点への遡及によつたのだという、元来具わっていたものの発見といった満足感の表明があつたといつてもよいのである。つまり新しい拡張性を帯有した自らの経験次元が日本的な自我不確実回路によつて個内への箝合を阻まれたという内心の焦燥とこれが生起せしめた潜在意識下での欲求不満は父の影響を夙にうけ、既に十七才の時に書いた古今総論なる一文で上古明王治を創め居を定め二十余世を歴て大変乱無しと謳歌した、天子自ら国民より成る軍隊を統率し給える古代の理想図像が延長された先王の道で充足を見ることになつたのである。ここに若年の頃反体制的であつた山陽を晩年に見る体制順応論者に転向せしめた基因が有し、山陽の転向を支えた、かかる弾力性を具えた折り返しの日本的な思想構造こそ日本的な転向の底で働き、この特殊日本的な転向を規定するものなのである。この意味で論贊の所説展開の支柱となっている、“実”・“道”・“用”より成る体系こそかかる日本的な思想構図作動の一軌跡だといつてよからう。東京新聞一九八四年一月三

日付紙上で筆洗子がのべているところはこの点でまことに示唆に富んだものである。ここで日本人の歴史観をとりあげ、年月は日本人にとって始めから終りなき世であるとする。つまり年の始めは一月一日でも立春でも同じであつて、始めは回転する輪の一点をただ定めたわけでしかなく、いわば時間を輪と見るところに我々日常人の歴史観があり、この円環として時間をとらえ、直観するところから人間の日々の営みは永遠につながると考えられることになるとする。この日本民族の楽天的で現実的プラグマティックな性格はこの輪の史観に基づく終りなき世のめでたさに関わっているとされるのである。⁶²既に指摘したように日本思想構図はモンスーンの風土の規定する伝統的な個閉塞を伴なう特殊な自我を軸に二重の反転メカニズムをとることで用体系による経験定位を果たし、道を中心とした同心円、而も外への拡張のベクトルを帯有した波紋状スペクトル⁶³重層構造図式を呈するものである。そこでは「道」と本来的には個的経験でしかない「実」との対極性は媒介觀念たる「用」に流れ込み、吸収され、一種の弁証法的自己同一の形をとつて道の同心円像として指定されるのである。まことにこういった「用」による「道」の波紋的な又開かれた渦紋状の⁶⁴◎といった同心円的な展開軌跡こそ日本的な思想構図模型の姿なのである。

だから、頼山陽が鎖国日本の門を敲き、通商を求めるロシアに触発されて動き出した新しき變動の時代に即応して経験の分野に新しい美酒を注ごうと考えて、自主的経験定位の苦闘をいやでものりこえ、その結実たる「実」・「用」・「大義」の三本柱による体系を確立した時、かかる同心円的な円環の周縁における付加として経験は位置づけられ、組み込まれたのであつた。この日本政記論賛所説にその断面を鮮かに見せている構図こそ日本の近代思想が一定度の近代化の達成と他方での停滞ないしは限界を呈するに至る⁶⁶基因をなすのであり、個的経験が文字通り新しいものとして成立するその凝集核ともいふべき個我的、「道」による吸収によつて新しきものが新しきもののままではなく、真

は新なり否新は真なりとして、そのまま常に古きものに転成してしまふ温故と知新とが連続することになる機序を働かせるものとなるのである。この独自の我指定を欠く日本的自我こそ拡張の宴のあとに停滞を伴わせ、また用に見られるプラグマティズム的な作動が周縁での円拡張を生むことになる基体をなすのであって、このため微視的には変動に際して、自らの側からの積極的対応を見せながらも巨視的に見ると同一であって、それがまたヨーロッパ近代像に酷似した現象を呈する反面で、擬似化させてゆく似而非進歩性の相貌を示させることにもなるのである。極めて西歐的な表層の下に独特な日本思想特殊のカタルシス手法としての襖を保たせるのも、この構図のなすところなのである。こうして、まえがきでの課題を自らに与えた私としては、この日本思想構図のいわば深層をなしている日本的自我を指定、再生産せしめている強靱な個皮膜に、山陽政記論贊に見られる日本的な経験批判論形成のハイマートを探りあて得たと思うわけである。それだけに日本思想は西歐近代の進歩の宗教とは異質であるといえよう。戦中世代たる我々の贖罪の道は、この西歐と日本思想構図の真の接合の方途を模索することであり、徒らなる模倣とまた依怙地ともいえる守旧を排し、ツルゲーネフが「煙」で語る如く、アルファベットより入ること、つまり、この個皮膜の強靱さこそ、反面教師として、ヨーロッパの個構造の未完を我々に告げていることを直視すべきなのである。西歐がかかる未完なものを完成された虚像として押しつけ、また、この模型こそ非西歐がそれ自身の未完を克服する極限值としてとらえるところに所詮は未完と未完の緋い合わせたる矢野暢氏が指摘されている非生産的状況であるトレード⁶⁷フの現象が生れてくると考えられる。戦中世代たる私に課せられた義務は非西歐地域の一つである私の、また我々の共有財でもある日本の真の近代化の道を斜視的な視座にたつて、西歐思想構図が現状のままではモデルたり得ぬところから探り、仮令現実政治の歯車から、おくれようとも、かかるヨーロッパ個構造論の未完を規定している諸要因を

“アルファベット”と考え、急がば廻れの地道な努力を重ねることにあると思うのである。これこそ私の一つの“わだつみの声”に他ならぬであろう。

“完”

注

まえがき

- ① 朝日ジャーナル 1983.11.4 インタービュー p.14
- ② 前掲 p.14～p.15
- ③ この思想構図という時の“思想”には意識下の *idea* といった意味をもたせており、文化という用語に近い。だが基底的なものへの志向をこの“下”という言葉が示しているので *idea* の方がより動的、より過程的である。この *idea* は想念といった表現をあてるべきであろうがやや慣れを欠くので思想という曖昧な言葉を用いたのである。尚お、こういった *idea* については José Ortega y Gasset *Epistolario* p.62 L.3～L.10 参照
- ④ 政経論叢 第三七・三八号 所収 デモクラシー論理のアナトミアなど参照
- ⑤ 中村真一郎 頼山陽とその時代 上・中・下（中公文庫）ここでは特に下 p.319～p.332（以下中村 時代と略称する）

I

- ① 岩波書店版 日本思想大系所収 頼山陽 原文 p.625 L.6（以下岩波大系として引用する）
- ② 岩波大系 p.663 だが、安藤英男 考証頼山陽 p.267, 268 などによると九十三となっている。その根拠は恐らく氏の編まれた頼山陽選集 全七巻の中にあると考えられるが、手許にないため、一応ここでは九十二としておきたい。
- ③ 岩波大系 p.656 朝鮮の役は論賛第九十（原文 p.623 上段）である。
- ④ 岩波大系 原文 p.624 尚お安藤 前掲 p.267によると、この論賛第九十二（安藤では第九十三論文としているものである）

ろう）の校訂がおわって瞑目したとなっている

⑤ 岩波大系 p. 658

⑥ 全く推断の域を出ないが、いろいろの動機が考えられる。(i) 山陽自身病が篤くなり記憶ちがいをしていた。(ii) 八十余篇のみはこの跋文執筆の段階で補筆の必要がないと考え、他の諸篇は未定稿とみていた。(iii) 特に豊臣増田租論は武治への痛烈な批判の文であり、断圧の対象ともなりかねぬので、敢えて数の中には入れなかった。(iv) 跋の日付は九月となっているが、その後他の論贊が付加された。これは題名の変更からも推測されるところである（岩波大系 p. 653）尚お、安藤 前掲p. 267では九月三日頃までに一応出来て、最後の日までに校訂をおえていると述べているが、それならばどうして数の訂正をしなかったのか、謎が深まることになる。一応こういった臆測が可能であるが、その他私の見落しているものもないとはいえず全篇のなかであって明確な断定は差し当っては下せぬといつてよからう。

⑦ 岩波大系 p. 656, p. 653

⑧ 岩波大系 p. 653

⑨ 岩波大系 p. 651

⑩ 中村 時代 下 p. 174 小竹松陰父子宛ての書翰 岩波大系 原文 p. 610 下段にある為世戒云の表現参照

⑪ 岩波大系 原文 p. 459 以下参照特に一つのモデルはこの p. 459~p. 460 にあるのではないか。

⑫ 岩波大系原文と岩波文庫版 日本外史 上・中・下（以下文庫外史と略記する）とを彼此対照すれば明らかであろう。

⑬ 中村 時代 下 p. 173 ただこの延長は内容的に同一構図をとるという意味においてであって経験論とその定位の前提ともいうべき道との関わり合い、すなわち体系論より見ると外史は順列的に経験体系化へのもの、政記はこの体系をふまえてのものであり、まさにフィードバックであってヴェクトル的には逆であるといえる。

⑭ 岩波大系 原文 p. 494

⑮ 岩波大系 原文 p. 620

⑯ 中村 時代 下 p. 286 以下、ここでは残念ながら頼山陽全書がないために氏の引用テキストに拠るしかなく、必要な手続きを省略したまことに恥かしい取り組みしかできなかった。文献入手の上補いたいと思っている。

⑰ 中村 時代 下 p. 303

⑮ 中村 時代 下 p. 296

⑯ 中村 時代 下 p. 289

⑰ 岩波文庫版 日本外史 上・中・下によると論賛は次のようである。平氏論賛（上 p. 99～p. 102）48行 北条氏序論（上 p. 223～p. 225）30行 北条氏論賛（上 p. 276～p. 279）56行 楠氏序論（上 p. 280～p. 283）46行 楠氏論賛（上 p. 333～p. 335）29行 新田氏序論（上 p. 336～p. 338）40行 新田氏論賛（上 p. 384～p. 387）49行 足利氏論賛（中 p. 133～p. 137）71行 後北条氏序論（中 p. 138～p. 141）52行 後北条氏論賛（中 p. 178～179）25行 武田氏、上杉氏論賛（中 p. 244～p. 247）47行 毛利氏論賛（中 p. 299～p. 301）32行 織田氏論賛（中 p. 393～p. 395）41行 豊臣氏論賛（下 p. 183～p. 187）52行 徳川氏論賛（下 p. 467～p. 472）48行である。頁にして55行にして665行、だが本文1200頁を超えていて明らかに記事に対して論の占める割合は少ない。これに対して日本政記では岩波大系解題 p. 663の表に見られるように記事行数3008に対して論賛行数は実に1662行にも上っている。勿論活字の大きさ、判の差を勘案せねばならぬので単純な比較はできぬが記事と論の相関的比重では政記論賛が遙かに大きい。大阪の小竹松陰宛の前掲書翰でも山陽自身が事迹は外史に譲る心なれども論は多くするに努めていると語っているので、岩波大系解題 p. 663の示すように日本外史の書き方を踏襲していることは確かだとしても日本政記が外史の単なる補巻でないことはこの記事と論賛の比率が何よりも雄弁に物語っていることなのである。

⑱ 論賛が当否は別として強烈な自説主張の場であったことは特に論賛の第一、第六、第二十一、第二十二、第二十三、第四十六、第五十九（これは以為となっている）第六十七、第六十八（これも以為）第七十二、第七十五、第八十八、第八十九、第九十でこの裏曰不然といった表現の用いられることで明らかであろう。また論賛第三十六にある吾断以為全寛也、論賛第五十八で吾以為皆戯也といった表現には極めて強い断定の調子が窺われる。

⑲ 中村 時代 下 p. 297

⑳ 本稿 II 論賛所説の底層的メカニズムでとりあげることになる。ただ、安藤 前掲書にあつては、中村 時代が可成り頁を割いて叙述しているノイローゼ、精神異常については全く触れず、その p. 88でそのような故障はなかったと春水の弟柔児襲婦自江戸 会諸友小酌という詩の西窓燭下醉陶然を引いて断ずる。いずれが真実なのか資料不足の私としては極め手を欠いているが、安藤氏の叙べられるところは聊か整合的であり、そういった意味で苦悩し、挫折し、また立ち上るといった山陽の早熟夙才的な生なまの人間性が後退している感をうけるし、何にもまして、その体系形成への苦闘の深さが描かれていないと考える

ので、差し当っては中村 時代に準拠して筆を進めたいと思っている。

②④ 和辻哲郎 風土 岩波文庫 p. 161 以下特に p. 162, p. 168, p. 170, p. 175, p. 179 参照のこと。

②⑤ 論贊第六 道一而已矣。道之在天下也 猶日月也 日月者天下之日月也 非一国所私有也 道亦然……皆存於自然 非有待於人作也 論贊第七 天為民立君……論贊第十七 其与王室比隆也 乃天道也……天道不可覩也 以人心視之也 論贊第二十五 不断以公道 論贊第三十七 仲尼贊乾曰 天行健 論贊第四十一 是天道所不与也 論贊第四十二 俯就我馭者 由是道故也 論贊第六十三 而其家得伝九世 無天道耶 襄曰有天道政也 論贊第六十五 而天道好還如此 論贊第七十五 祖宗之所誘為也 天道也……自天与祖宗視之 一也……天人之心……己而天悔其禍 論贊第七十九 故禍先發於赤松氏 天也……而天則必不赦足利氏之叛 論贊第八十二 天託一人 養万民……天疾足利氏深矣 欲暨其家 論贊第八十七 其變者天運也 而必由人事而變……則天運然也……蓋天厭天下之乱……不知其變者 乃不能不變也 天也……其膏沢弥 満海宇 論万民之骨髓 而不知焉 唯天知之……故變者天也 不變者 亦天也……天為之保証也 故受知於天深者 久而 不絶 愛知於天淺者 未久而断……所以天忽予之而忽奪之

②⑥ 中村 時代 上 p. 75, p. 95下 p. 289, p. 309 山陽が当時の昌平校のアカデミズムと目立った異和性をもってはいなかったといえるからである。

②⑦ 岩波大系 原文 p. 467 以麴米銅鉄蚕桑 為自彼来者 儒者之見也 欲廢織縫釀冶者 国学者之説也 故曰 皆非也 ここにこういたつ軌道修正のあとが窺われる。

②⑧ 岩波大系 補注 p. 627 以下で儒教的な人間主義、合理主義にたっているのは論語 易経注の引用更に中村 時代 下 p. 302で儒学を我が道としていることでも明らかである。だが諸儒への批判（中村 時代 下 p. 309）家学に対して父よりも自由な立場にあること（中村 時代 上 p. 94）実用主義的（特に中村 時代 下 p. 290, 291参照）体制外的傾向（中村 時代 下 p. 153, p. 155）を山陽が有していたことを勘案すると道を固定的にとらえるのではなくて、人間主義・合理主義的な方向により力点がおかれていたのであり、静態的には同一構図でも、動態的にいうとメカニズム的に齒車の大きさに差があるといつてよい。

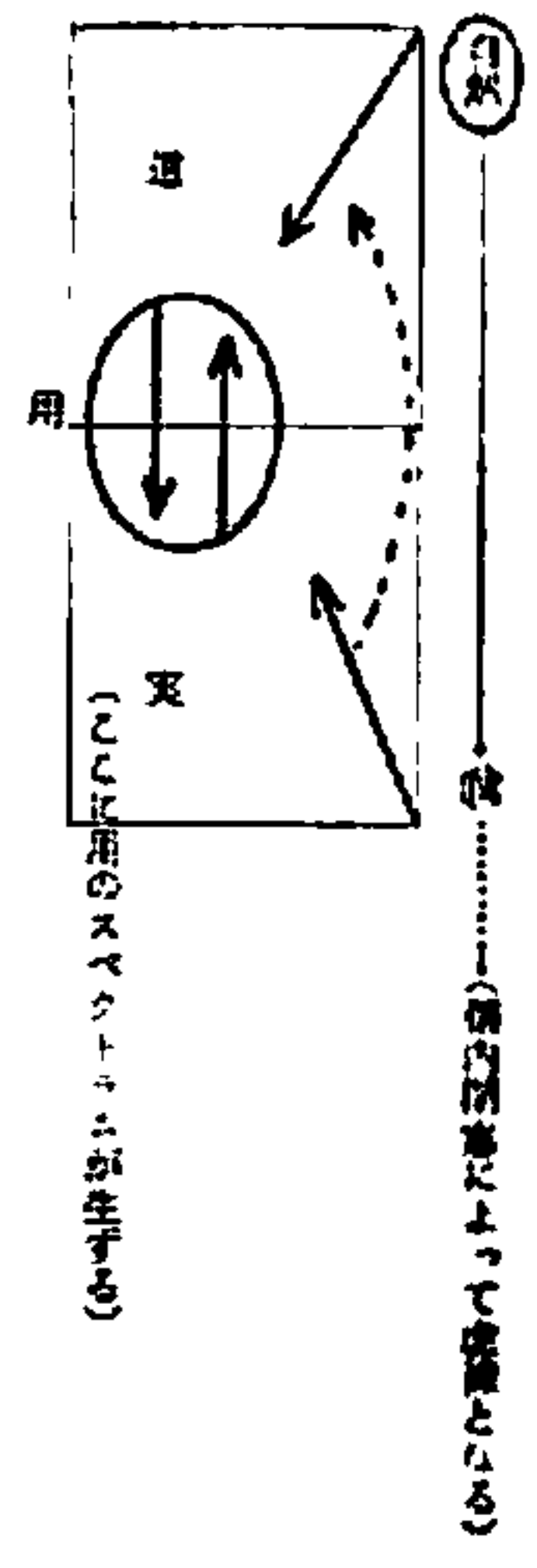
②⑨ 岩波大系 原文 p. 468, p. 575, p. 609

③⑩ 岩波大系 原文 p. 476 同書のものは p. 467 の則雖無経籍、其道固具在である。

- ③① 岩波大系 原文 p. 467 且天先王已取而用之 著為令典矣
- ③② 岩波大系 前掲参照
- ③③ 岩波大系 原文 p. 468 是我列聖之所伝 p. 488 有根斯有枝 有民斯有君 列聖之所為
- ③④ 岩波大系 原文 p. 467 是議先王之典者矣
- ③⑤ 岩波大系 原文 p. 480 則不達祖宗立法之意
- ③⑥ 岩波大系 原文 p. 491 抑亦祖宗德決紀綱 p. 517 其攬權柄 振紀綱 p. 521 国之所以存也 而其所以盛衰息耕者 在
於紀綱版籍二者 故祖宗定制 必於此致意焉
- ③⑦ 岩波大系 原文 p. 477 王業之衰 p. 480 天智微 王業或幾乎熄乎
- ③⑧ 岩波大系 原文 p. 477 我邦君臣之義 度越万国
- ③⑨ 岩波大系 原文 p. 491 抑亦祖宗德沢紀綱 迥別於唐業也
- ④① 岩波大系 原文 p. 521 本朝富庶過絶外国
- ④② 岩波大系 原文 p. 477 王業之衰に一例がある
- ④③ 岩波大系 原文 p. 575 天豈聴之乎
- ④④ 岩波大系 原文 p. 509 先天託一人 養万民 非取万人 養一人也 ここに本末顛倒の一例がある。
- ④⑤ 岩波大系 原文 p. 609 故生此喪心之人……………以極其乱
- ④⑥ 岩波大系 原文 p. 540 是天道所不与也
- ④⑦ 岩波大系 原文 p. 508 不断以公道而挾私用術

④⑦ 前注28参照

④⑧ 図示では次のようになろう



④⑨ 島田虔次 朱子学と陽明学（岩波新書）p.5以下、特にp.7, p.8参照

⑤⑩ 既に引用した原文の中に出ているが王政は原文 p.526 世之言王政 p.560 以宰海内民者 王政也 朝政についての一例はp.544 視朝政如塵飯土羹者

⑤① 岩波大系 原文 p.462 仁信明武 繼天君民之道尽矣

⑤② 岩波大系 原文 p.468 天為民立君 君自儉以養民 民富則君富 p.575 知天之立己為民也 是以自儉勤以養民

⑤③ 岩波大系 原文 p.463 孔子曰務民之義

⑤④ 岩波大系 原文 p.476 不如仏説之新異……而諉之過去之報

⑤⑤ 岩波大系 原文 p.477 而西竺之説壞之……既戸・馬子也 p.491 聖武聰宮闈之勸 糜府庫之藏 塗生民之膏血於寺塔 仏像 p.543 至於白河 併其名不舉也 而興造之費 空竭府藏 其所以為功德三千仏像 四十万塔婆 皆塗民之膏血耳

⑤⑥ 前掲 原文 p.463

⑤⑦ 岩波大系 原文 p.596～p.597 祖宗之所誘為也 天道也……天与祖宗視之 ここにそし兩立、近似性が示されている。

⑤⑧ 岩波大系 原文 p.488 有民斯有君 列聖之所為 亦察於此爾 後世則不然 以為君本也民末也 務措克之 凌其膏血 以自殖

⑤⑨ 岩波大系 原文 p.494 豈非其心以宗社為憂 公且誠者也耶……公且誠 則人心服焉

⑥⑩ 中村 時代 下 p.297 彼の學問がいかなるものかよく示されている。氏の引用によると我が學に一字の宗旨あり。曰く 実 又析きて兩字となし曰く用に適う……故に又衍べて三字をなし曰く大義に通ずである。そして空の天位、実の天職といった（岩波大系 原文 p.575 にある天下之実 在於此 而自儉勤以養民 是不有天位而為天職也）発想や更に岩波大系 原文 p.581 曰。政不失也 而所以為政者失矣 原文 p.595 制馭天下恩与威而已 原文 p.621～p.622 皆決之於未用者也兵は用いないのを最上とするといった複眼的な見方はこの体系のもつ複合性に対応するものであろう。また天職のみの武治と天位、天職を併せもった王政では後者が優るといった考えも（岩波大系 原文 p.480 日立吏簡取民廉 則不失我邦固有之美也……而武門之治 民反便之 未必不申於此 雖然 武治有其簡 而無其廉 武治は一方を欠いていることの指摘である）医薬での付子の効用についての知識もこの複合性の証左である（岩波大系 原文 p.564 不知医之善治疾者既用硫黄 又用朮令 義経硫黄也 不可独用必配範頼之朮令 然後可以奏功）

- ⑥1 岩波大系 解題 p. 654
- ⑥2 岩波大系 原文 p. 488, p. 495, p. 499, p. 502, p. 503, p. 504, p. 514, p. 524, p. 530, p. 534, p. 542, p. 530, p. 534, p. 542, p. 560, p. 563, p. 575, p. 584 など参照 (引用は省略)
- ⑥3 岩波大系 原文 p. 460 雖然政任天造
- ⑥4 岩波大系 原文 p. 488 民之於君 猶水之於魚 p. 499 人主者収天下之物 而支配之天下者也 p. 502 国与民 相須而存者也

⑥5 前掲 注60

- ⑥6 岩波大系 原文 p. 488, p. 495～p. 496, p. 502～503 特に p. 516 詔曰 勿以兵故失農時……故曰 勿廢農時 且耕且戰
- ⑥7 岩波大系 原文 p. 499, p. 597 抑後醍醐念祖宗濟民之心
- ⑥8 岩波大系 原文 p. 489, p. 502～p. 503, p. 624

⑥9 前掲 注60

- ⑦0 例えば岩波大系 原文 p. 494 などにある表現である。

- ⑦1 岩波大系 原文 p. 493, p. 501, p. 536, p. 588, p. 547, p. 555, p. 571 などであり、人材、国土の条件としては直言 道の本にたった判断の持主 事外に高視して厚禄を以て事えざるゝことなどがあげられている。

- ⑦2 岩波大系 原文 p. 542

- ⑦3 岩波大系 原文 p. 499 王者之恩 不在小恵 その他 p. 542, p. 576, p. 579～p. 580, p. 581～p. 582 など参照

- ⑦4 岩波大系 原文 p. 542 剛明のみでは不十分であつて p. 512 などにある先見性をもつ必要がある。

- ⑦5 岩波大系 原文 p. 534～p. 535 参看 p. 564

- ⑦6 岩波大系 原文 p. 473, p. 498～p. 499 特に……の其外所獲 不能償也 豈非計之失者耶 総合的な判断をする必要性を強調する。

- ⑦7 岩波大系 原文 p. 463～p. 464, p. 507～p. 508, p. 578～p. 579 特に……の非一世也に注目のこと

- ⑦8 岩波大系 原文 p. 507～p. 508, p. 607, p. 608 曰 不公也 不一也……非不公而何

- ⑦9 岩波大系 原文 p. 499～p. 500 拘於故常 これは継続と矛盾するようであるが、私的な矮小化されたものとみる。そこに

用複合体の効用が見られる。

- ⑧⑩ 岩波大系 原文 p. 468~p. 469, p. 524, p. 526~p. 527, p. 530, p. 563, p. 582~p. 583
- ⑧⑪ 岩波大系 原文 p. 524, p. 527~p. 528, p. 530, p. 542, p. 550
- ⑧⑫ 五木寛之 日本重層文化の可能性 ①~⑫ 日刊ゲンダイ 2024回~2044回

II

- ① 岩波大系 原文 p. 618~p. 619
- ② 岩波大系 原文 p. 603
- ③ 岩波大系 原文 p. 495~p. 496, p. 498~p. 499, p. 601~p. 624
- ④ 岩波大系 原文 p. 613
- ⑤ 中村 時代 下 p. 21
- ⑥ 既に注 I 20 で示したように外史には若干序論がある。

- ⑦ 中村 時代 上 p. 157
- ⑧ 中村 時代 下 p. 132
- ⑨ 中村 時代 下 p. 134
- ⑩ 中村 時代 下 p. 336 中 p. 81, p. 204

- ⑪ 岩波大系 原文 p. 547 憲清資不過北面 官不過左兵衛尉 処一世奔波之後 有以窺其端倪 以為事勢如此 官不可為 故 雖頗受寵使 而決然去之……憲清棄官之歳

- ⑫ 中村 時代 上 p. 75 中 p. 53, p. 253 など参照
- ⑬ 中村 時代 上 p. 214 中 p. 145, p. 275, p. 292
- ⑭ 中村 時代 中 p. 152
- ⑮ 中村 時代 上 p. 25, p. 62
- ⑯ 中村 時代 中 p. 279

- ①⑦ 中村 時代 中 p. 9, p. 10 下 p. 286
- ①⑧ 中村 時代 下 p. 336 以下 安藤前掲書 p. 287 以下の略年譜参照
- ①⑨ 有斐閣新書 日本史 ⑤ p. 97
- ②⑩ 有斐閣新書 日本史 ⑤ p. 77
- ②⑪ 有斐閣新書 日本史 ⑤ p. 133
- ②⑫ 中村 時代 中 p. 68, p. 260, p. 263 林述斎にみる実務家としての特長に注目のこと
- ②⑬ 中村 時代 中 p. 327, p. 331
- ②⑭ 中村 時代 中 p. 429
- ②⑮ 中村 時代 中 p. 331
- ②⑯ 中村 時代 中 p. 152 下 p. 157
- ②⑰ 中村 時代 中 p. 311
- ②⑱ 中村 時代 中 p. 398, p. 425
- ②⑲ 中村 時代 下 p. 154
- ③⑰ 中村 時代 上 p. 128
- ③⑱ 中村 時代 中 p. 259
- ③⑲ 中村 時代 下 p. 309
- ③⑳ 岩波大系 原文 p. 579
- ③㉑ ここで注目すべきことは個と私とは通常考えられ勝ちであるように決して相蔽うものではない。個の内での公私の構造的定立こそ果さるべきものでありながらも未だ完了していないアポリアであり、この処理こそ緊要な課題である。
- ③㉒ 日本古典文学大系 古事記 祝詞 p. 110 豊葦原之千秋長五百秋之水穗国者 新潮日本古典集成 万葉集巻一 p. 447 うま
- ③㉓ し国ぞ蜻蛉島大和の国は参照
- ③㉔ 直ちにヨーロッパ的とはいえないが、ここでは世界と個領域のヘシオドスの非連続、その折れ軸化（拙稿 ヘシオドス 労働と日々の一断面参照）に注目する必要がある。尚お南 博 日本的自我（岩波新書）p. 44 原罪という考え方はなくと述べ

られている。日本人の伝統的な罪意識については六月晦大祓（日本古典文学大系 古事記 祝詞 p. 424, p. 426）という祝詞の次のような表現で推測できよう。安國止平^{久氣}所知食武國中爾成出武天之益人等我過犯^{牟羅}々罪事波天津罪止畔放・溝埋・樋放・頻蒔・串刺・生剝・逆剝・屎戸許許太久乃罪乎、天津罪止法別^{旦氣} 国津罪止生膚断・死膚断・白人・胡久美・己母犯罪・己子犯罪・母與子犯罪・子與母犯罪・畜犯罪昆虫乃災・高津神乃災・高津鳥災・畜仆志蟲物為罪、許々太久乃罪出武 如此出波 天津宮事以旦 大中臣 天津金木乎 本打切未打断旦 千座置座爾置足^{波志} 天津菅會乎 本刈断未刈切旦 八針爾取辟旦 天津祝詞乃太祝詞事乎……天下四方國^{波爾} 罪止云布罪波不在止、科戸之風乃 天之八重雲乎 吹故事之如久……彼方之繁木本乎 焼鎌乃敏鎌以旦打掃事之如久 遺罪波不在止 祓給比清給事乎……となっている。特に傍線部が重要である。資料不足で速断はできぬが、原罪観と異なっていることだけは確かであろう。

③⑦ ホセ・オルテガ・イ・ガセーが「衣裳」哲学によって示すところである。ハルプでは Dilthey y la idea de la vida V Segunda expresión de la vida fundamental par-164 並びに注2参照 (Kant, Hegel, Dilthey colección El Arquero p. 194)

③⑧ 和辻哲郎 風土 p. 178

③⑨ 南 博 日本的自我（岩波新書）特に日本人のもつ自我不確実感の指摘参照

④⑩ 中村 時代 上 p. 146 こういった見解はすぐれている。

④⑪ 中村 時代 上 p. 151 中 p. 280

④⑫ 中村 時代 上 p. 25, p. 33 更に p. 36 など参照

④⑬ 中村 時代 上 p. 19 下 p. 319

④⑭ 中村 時代 上 p. 9 以下 p. 60

④⑮ 中村 時代 中 p. 75

④⑯ 中村 時代 下 p. 298

④⑰ 中村 時代 上 p. 88 下 p. 301

④⑱ 中村 時代 特に中 p. 205～p. 207

④⑲ この実用という言葉は *πράγματι* 以上に山陽における実質的な実の用たる道の用領域の措定をふまえてのものである。

⑤⑩ 日本的朱子学の形成については講座日本近世史 9 本郷隆盛・深谷克也編 近世思想論 2章 儒学思想論 日野龍夫

p.108 以下 源 了円 徳川合理思想の系譜第一部 朱子学の変容参照 また岩波大系 貝原益軒・室鳩巢 p.445 以下の荒木見悟氏の朱子学の哲学的性格、特に二以下参照尚お、丸山真男 日本政治思想史研究も参照が必要である。

⑤1 中村 時代 上 p.95 下 p.207

⑤2 中村 時代 下 p.207

⑤3 中村 時代 下 p.152

⑤4 中村 時代 中 p.53

⑤5 中村 時代 上 p.263

⑤6 中村 時代 上 p.255 中 p.203 下 p.307

⑤7 中村 時代 下 p.30

⑤8 中村 時代 下 p.115, p.152

⑤9 中村 時代 中 p.54

⑥0 中村 時代 下 p.142

⑥1 中村 時代 下 p.212

⑥2 東京新聞 一九八四年一月三日朝刊筆洗参照

⑥3 五木寛之 前掲 特に重層という語に注目すること

⑥4 西田哲学もかかる構図の論理化と考えられる。差し当っては全くの仮説であるが機を得て詳論したいと思っている。

⑥5 有斐閣新書 日本史 (5) p.91~p.93, p.130~p.132

⑥6 前掲 近世思想論 p.14~p.15

⑥7 矢野 暢 南北問題の政治学(中公新書) p.186~p.187 尚お、この原語 trade-off については、坂下 昇 現代米語コー

パス辞典 p.1082~p.1083 参照のこと。